

安田式遊具実況見学印象記

特定非営利活動法人失敗学会・会長

(株)畑村創造工学研究所・代表 畑村洋太郎

A. 見学概要

- 見学日程 : 2018年4月28日(土) 晴れ
- 見学場所 : 学校法人竹美学園 ちくみ幼稚園 (埼玉県三郷市彦沢 1-19)
- 見学内容 : 各種の安田式遊具で実際に遊んでいるところを見学.
- 見学手配 : 特定非営利活動法人失敗学会 副会長 飯野謙次
- 見学同行 : 特定非営利活動法人失敗学会会員約8人
- 実演準備 : エール株式会社, 学校法人竹美学園ちくみ幼稚園
- 体育指導 : 安田式体育遊び研究所・所長 居関達彦様
- 実演してくれた子ども : 本年3月でちくみ幼稚園を卒園し, 現在は公立小学校の1年生, 約30人. 保護者が付き添いで来てくれた.
- 記録 : 2018年5月20日
- 行程 : 2018年4月28日(土)
- 09:48 秋葉原駅発 つくばエクスプレス
- 10:11 三郷中央駅着 幼稚園の車で幼稚園に向う
- 10:30 ちくみ幼稚園着 各種遊具実使用見学
- 園庭で雲梯, ジャングルジムなど見学
- 2階の広い部屋で, 前転・横転など, および平均台など見学
- 12:00~14:00 昼食会および意見交換
- 見学の動機 : 昨年(2017年12月16日)の失敗学会年次大会の発表で安田式遊具の紹介があり, 実際の遊具を見たいと思っていた. 失敗学会の飯野氏が見学会をアレンジしてくれたが, 遊具の製作現場を見学するより, それが実際に使われているところを見る方がよほど意味があると考え, 今回のような見学会となった.

B. 見学した遊具

(1) 雲梯 (園庭) (図1)

雲梯は少し傾斜があり, 側面に少し斜めに梯子が取り付けられていた. 子ども達は梯子を上って足の届かない高い方にぶら下がり, 低い方に渡っていき, 低い方に行くと足が地面に付く. 一つずつ交互に渡っていたが, 一つおきに渡っていく子がいたかどうかは覚えていない. 子ども達は端まで行くとまた高い方に戻って列に並び, 順番に雲梯をしていた.



図1 安田式雲梯

(2) ジャングルジム (園庭) (図2)

ジャングルジムの格子は随分ピッチが大きいなと感じた。高さも横の間隔も、50cm ピッチぐらいだったように思う。ジャングルジムの片側には登降棒(登ったり滑り降りたりする棒)が取り付けられており、ジャングルジムとその登降棒との間の距離が一方の端の方は広く、反対側は狭くなっていた。



図2 安田式ジャングル登降棒(左)とジャングラミング(右)

(3) 吊り輪 (園庭) (図3)

吊り輪は足が届かない高さの輪が連続して吊り下げてあり、雲梯を渡る要領で前後に体を振って渡っていく。多くの子どもは輪を一つずつ移動していたが、とても活発な子は一つおきに進んでいた。



図3 安田式吊り輪

* 図1～3はエール株式会社ホームページより引用

(4) 避難用を兼ねた滑り台（園庭）

上記の(1)～(3)の遊具は実際に遊んで見せてくれたが、それとは別に建物の2階から園庭に降りる避難用滑り台があった。これは実演がなかったが、日頃この滑り台で遊んでおり、非常時の避難と遊びとが結びついているという話であった。

(5) マット運動（体育館）

園舎の2階に講堂のようにも体育館のようにも見える広い部屋があり、そこでマット運動の実演として、前転（でんぐり返し）と横転（横にゴロゴロと転がって進んでいく）を見せてくれた。

(6) 平均台（体育館）

マット運動でマットの端まで行くと、戻ってくるときに平均台を渡って行くことになっていた。

どの遊具で遊ぶときも、先生の指示の通りに順番に動いていくというのではなく、それぞれの子が自分で勝手に動いていた。順番を守り、前の子との距離を保ちながら自分の動きのタイミングを見計らい、前が詰まったときは自分も止まり、前が開けば動き出す。子ども達自身がそのような判断をしているのがとても良くわかった。

C. 安田式体育遊びおよび遊具の考え方

安田式遊具を使った体育遊びを見学して、私が考えたことを以下に記す。

どの遊具も、一見すると、その辺で見かける遊具と大きく違うところはなく、私が子どもの頃

に使ったことのあるような感じのものばかりだった。しかし、丁寧にしてみると色々な工夫がされているのがわかった。私が以前考えていたものと比較して色々考えることが多かった。

安田式体育遊びおよび遊具の基本的な考え方は次の通りである。

第1に、遊具を使って遊ぶことで、子どもの成長に不可欠な身体的能力が向上するだけでなく、脳も成長するということが考えられていた。具体的には、運動の中で、体中のすべての関節が可動範囲内で十分動き、体中の筋肉が全て使われるように考えられている。さらに、自分の動き全体を自分がきちんと感知して、そして自分の動きを自分でコントロールするという脳の動きが考えられているというふうに見えた。

第2に、子ども達は教えられた通り、または指図された通りに動くことは期待されていない。挑戦し、できなければ自分なりに工夫して運動したくなるように遊具が作られているように見えた。

第3に、子どもは自分がやりたいと思うことに挑戦し、その結果を体得して成長していくものだが、挑戦してうまくいかないときに、自分なりに工夫をし、やってみるとうまくいくという体験ができるように、指導者が上手に子どもをサポートしていた。たとえば、逆上がりは足を蹴るのと同時に腕を引き付けて、体の重心が鉄棒の上に行くところまで持ち上げなければならないが、逆上がりができない子ども達は、そのタイミングが分からない。それを理屈で教えるのではなく、補助者がタイミングを合わせて体を持ち上げるのを手伝ってやると、逆上がりができるようになる。それを実際に見せてくれたが、とても面白かった。

第4に、子どもは個として発達するだけでなく、集団の中で自分がどう考え・行動すればよいか、いわば社会性を体得する。ここでは、合図に従って一斉に動くというようなことはせず、子ども一人一人が前の子と自分との距離を見ながら、自分がいつ動き出して、いつ止まらなければいけないかを判断して行動していた。このようなやり方によって、社会性が自然に身につくのではないかと思えた。

これらの体育遊びを実際に見せてもらっていて、筆者は今までに感じたことのない感覚を得た。いったい何なのだろうかと長いことわからなかったが、見学から3週間ぐらい経って、この印象記を口述する前になってようやく気が付いた。それはスペインでピカソの「ゲルニカ」の絵を見たときの感覚に似ているなということであった。言葉でうまく言い表すことはできないが、ゲルニカの絵を見て、自分が自覚していない部分で脳が反応をするのだということに気が付いた。今回の見学中もそのときと同じで、遊具で遊ぶ子どもを見て頭が刺激を受け、筆者の勝手脳が反応したのではないかと思うようになった。とても奇妙で不思議な感じがした。

D. 筆者がやってきた遊具との比較

筆者は「危険学プロジェクト」を10年間やってきたが、絶滅した子ども達の遊具（箱型ブランコ、遊動円木、回旋塔）の復活を目指して実物を試作し、実際に使ってもらえる場所に設置して子ども達に遊んでもらった。作ったのは、リンク機構を使った遊動円木（[図4](#)）、リング形ブランコ（[図5](#)）、回転ホッピングシーソー（[図6](#)）の3種類の遊具である。リング形ブランコは、

動く部分が一体化されているため接続部分がなく、しかもリンク機構が組み込んであるので、単純に振り子のような動きをするだけではなく、端まで行ったときにブランコがもう一段上にスッと上がるというふいぎな動きをする。回転ホッピングシーソーは、シーソーの一端に子どもが



図4 リンク機構による遊動円木



図5 リング形ブランコ



図6 木祖村こだまの森に寄贈した
回転ホッピングシーソー

乗り、その反対側に親が乗って、横方向に蹴るとシーソーが上下しながら回転するもので、宇宙遊泳をしているような感覚を味わうことができる。

遊動円木については、大塚にある筑波大学付属視覚特別支援学校で、小学校から高校生までの視覚障害のある子ども達に乗ってもらったところ、動きが非常にユニークで今までに味わったことのない不思議な動きだということで、とても興味を持ってくれた。そこで、長野県の「こだまの森」に設置して、改良しながら数年間使ってもらったが、結局は撤去し、廃却した。

もともと遊動円木は乗っている子どもたち自身が円木を揺らすことを想定して設計したものだが、円木に紐をつけて外部から力を加えて大きく揺らすような使い方をされているという実情を知り、危険であると考えて撤去した。このことから、様々な使い方を想定しないまま作るのは危険なことだということを学んだ。

リング形ブランコと回転ホッピングシーソーは、遊動円木と同時に長野県木祖村の「こだまの森」に寄贈し、現在も共用されている。子ども達はとても喜んで使っているという話である。

そもそも動く遊具が絶滅してしまったのは保守が十分行われていなかったためで、保守を正しくやれば危険は排除できると考えて3種の遊具を作ったのだが、実際の遊具は設計時の想定範囲を越えた使われ方をするという事を考慮していなかったことに気付いた。結局、動く遊具は適切な使い方を指導する人間がいなければ安全に使うことはできず、危険なものになってしまうと

いうことを学んだ。

私達は子ども達に動く遊具によって動きを楽しませるということを目指していた。しかし、結局は、動く遊具の持つ危なさに目をやらず、動きの楽しさだけを子どもに与えようとした考え方に無理があるということを知った結果になってしまった。

私達危険学プロジェクトは、子どもたちの周囲から動く遊具がなくなることによって、子ども達が危なさを学ぶ機会が減り、子ども達に危険を感じる力を育むことができなくなるのではないかと危惧し、動く遊具を復活させることを考え、3種類の遊具を試作した。しかし、安田式遊具は、目指すものが全く違う。動く部分が非常に単純化され、自然なものだけになっているので、これは今後発展・普及していこうと思った。改めて、遊具とは難しいものだと思うようになった。

E. 公教育の役割

幼稚園で安田式体育遊び指導法の下に安田式遊具に親しんで成長した子ども達が小学校に行くようになると、幼稚園にいるときと全く違う環境に置かれる。その子ども達を見て次のようなことを考えた。

学校に行くと子どもは変わる。学校は子どもを型にはめるものなのかなということを感じた。学校で過ごす期間は子どもが社会の一員になる準備をする期間だと思えば、重要な過程であると思うが、現在の学校教育は言われたことをその通りにやるということだけを子ども達に強要しているという面があるのではないかと思った。現在、日本の産業は高度成長期にやってきた方法を変えることができず、壁に当たって非常に苦しんでいる。小学校に始まり、中学校、高等学校、そして大学に至るまで、公教育の目標が“言われたことを正確にやる”，または“集団として規律を守って皆と同じことをやる”ということに偏っているのではないかと感じる。

集団の中の一員として動くためには、規律も約束も全部必要ではある。しかし、子どもが一人の人間としてきちんと成長していくのがまず基本だ。すると、就学前の幼児期は生き物としての準備期で、この間に自分の体を守るためのとっさの判断や反応ができるような基本の運動能力を身に付け、その後集団で行動できるような社会性を持たせるのが必要なのではないかと思った。

幼稚園とか保育園の時期が非常に大事だ。0～3才で体や脳の基本形ができ上がっていく。そして、3才位からの幼児期に最も必要になる要素が安田式遊具には盛り込まれており、就学前の時期をこういう環境で育っていくのが非常に重要ではないかと思った。

一方、危険学プロジェクトで考えた動く遊具は基本の運動能力や危険察知能力ができた子どもにはいいが、基本が身につけていない子どもに与えるのはやはり危ないのではないかと思った。そういう意味で動く遊具は6才以上の小学生以上の子どもに向いているのではないかと思った。

<謝辞>

園庭にセットされた安田式遊具で子ども達が実際に遊ぶところを見ることができたが、エール

株式会社の方々，体育指導をしてくれた居関達彦氏，また子ども達を集め，これだけのことを実際にやってくれた「ちくみ幼稚園」の園長，以下幼稚園のスタッフの方々に深甚の感謝をお伝えしたい．また，安田式遊具の本質を見抜き，このような見学会をアレンジしてくれた失敗学会の飯野氏にも謝意を表したい．

どうもありがとうございました．

以上